

〔研究ノート〕

天皇制と倫理 丸山敏雄の天皇制論の一考察

野中寛治（倫理研究所研究員）

はじめに

社会教育家で倫理研究所の創立者である丸山敏雄（1892～1951）は、天皇制、皇室、国体、神道などに関する多くの研究を行なっている。その中で、天皇制に関する戦後の主な論考をあげれば次のようになる。（執筆年順）

- 「天皇制の研究」 昭和22（1947）年
- 「天皇制の過去と将来」 昭和23（1948）年
- 「天皇制は倫理の世界にある」 昭和25（1950）年
- 「天皇制について」 昭和25（1950）年

これらの論考はいずれも、倫理研究所発行の『丸山敏雄全集』第五巻に収められている。なお は未定稿であり、 は講義・講話要項であるが、天皇制に関する最もまとまった論考は、 の「天皇制の研究」である。その概要については後述する。

ところで敏雄は、昭和26年の12月に亡くなっているが、その2カ月前に論文「易不易の原理」を書き、その中で天皇制について触れている。これが天皇制についての、敏雄の最後の言及となるものと思われるが、次のように述べている。

さて民族としての思想は、独立自守、日出ずる国としての自尊心を高く掲げて、変わるどころがなかった。ことに民族愛の中核として、国民が敬の高峰として、富士山のごとく高く清く仰いだのは、我が天皇であらせられる。天皇制こそ、日本民族の創生した文化のうち、最も偉大崇高、世界無比なる創作である。第1、倫理の結晶であり、第2、文化の養源であり、第3、政治の源泉であり、第4、教育の龜鑑であった。天皇制の熾たる存在こそ、日本民族思想の燦然たる栄光である。

ここで敏雄は、天皇制は倫理の結晶、文化の養源、政治の源泉、教育の龜鑑であるといっているが、それぞれがどういうことであるかについては詳しく論じていない。このことについて敏雄は、前掲の「天皇制について」の中で「天皇制は、宗教に非ず、法律に非ず、倫理の最高峰にして日本民族の樹立した文化の最高にある。それ故天皇制を無くすれば、日本文化は無くなる。天皇制が在ることによって、我国が在る。私はこのことについて学問的体系をつけて、他日発表する。」と述べていることから、時を得て未完の「天皇制の研究」を完成させることを意図していたと思われるが、その機会を得ることはできなかった。

本稿では、天皇制が倫理の結晶であるとはどういうことかに絞って丸山敏雄の天皇制論を考察していきたい。文化の養源、政治の源泉、教育の龜鑑については、他日論じることにしたい。